

國學院大學學術情報リポジトリ

資料翻刻：柴田常恵遺稿「雑録人類学教室
考古学会のことども」：解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 岳彦, 杉山, 章子, 大山, 晋吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001736

柴田常恵遺稿「雑録 人類学教室 考古学会のことども」

— 解題と翻刻 —

石川 岳彦
 杉山 章子
 大山 晋吾

〔解題〕

はじめに

「雑録 人類学教室 考古学会のことども」(以下では「人類学教室 考古学会のことども」と記す)は、明治後半から昭和にかけて活躍した考古学・文化財保護行政の専門家である柴田常恵が記した回顧録である。本稿は、その翻刻

および紹介である。

柴田常恵は明治一〇（一八七七）年に名古屋市に生まれた。明治三〇（一八九七）年に上京し、真宗東京中学高等科、郁文館中学内の史学館を経て、明治三五（一九〇二）年に東京帝国大学人類学教室雇となり、明治三九（一九〇六）年には同大学の助手となった。その後、昭和七（一九三二）年からは慶應義塾大学で講師を務める一方、内務省や文部省、帝室林野局などの嘱託、史蹟名勝天然紀念物調査会考査員を務め、戦後は文化財専門審議会委員として文化財行政の分野でも活躍し、昭和二九（一九五四）年に没した（大場一九七二）。

柴田が残した写真やガラス乾板、拓本、自筆のノート、遺稿といった数多くの資料は、大場磐雄を介して國學院大學の所蔵となり、柴田常恵資料としてこれまでに自筆ノート、写真、拓本などの一部資料の整理がおこなわれ、翻刻や資料の目録、画像データなどが書籍やオンライン上で公開されている。¹⁾

「人類学教室 考古学会のことども」は、この柴田常恵資料のなかの遺稿の一つである（写真1〜3）。内容は、明治三一（一八九八）年に柴田が初めて東京帝国大学の人類学教室を訪れた時の様子から筆を起し、自身も参加するようになった当時の人類学会の例会の状況などが詳細に記されている。さらに柴田が最初に人類学教室を訪れて以降耳にした、彼が関わりをもつ前のことをも含めた教室関係者の来歴やエピソード、教室と深い関連をもつ集古会や考古学会結成の経緯なども記載されている。

この「人類学教室 考古学会のことども」が記された年代は、本



写真1 「雑録 人類学教室 考古学会のことども」表紙

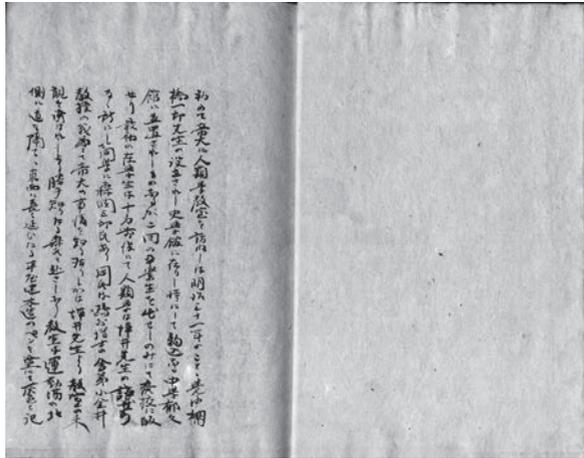


写真2 「雑録 人類学教室 考古学会のことども」
本文1 頁目

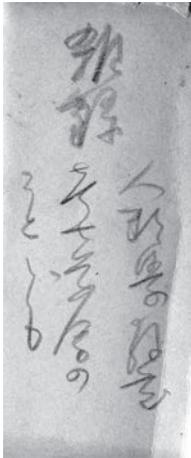


写真4 「雑録 人類学教室
考古学会のことども」
に挟んであったメモ書き

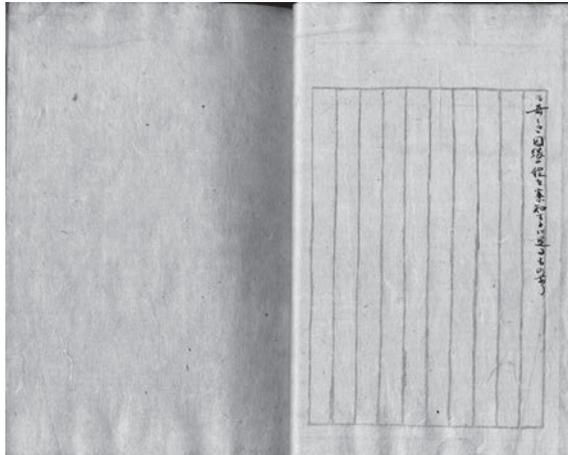


写真3 「雑録 人類学教室 考古学会のことども」
本文最終頁

文中に執筆した年月日が記載されておらず不明である。しかし、本文中の〈4〉に「若林勝邦、佐藤傳藏、大野延太郎の諸先輩に次ぎ、八木氏また逝かれて殆んど往事を語るものなく」と記されているため、この四人のなかで最後に没した八木氏、すなわち八木柴三郎が没した昭和一七（一九四二）年から柴田自身が没する昭和二九（一九五四）年の間に執筆されたものであると考えられる。

なお、「人類学教室 考古学会のことども」は、柴田の自筆による本文のみからなっており、彼自身によって付されたタイトルは無い。ただ、遺稿に挟んであった写真の断片の裏面を用いたメモに、赤字で「雑録 人類学教室 考古学会のことども」と記載されている（写真4）。筆跡から、これは國學院大學の所蔵となった後に資料の整理がおこなわれた際、大場磐雄によって記されたものと推定される。このように、この遺稿の本来のタイトルは不明であるが、本稿ではとりあえず整理の際に記された「雑録 人類学教室 考古学会のことども」をタイトルとして用いることにした。

一、「人類学教室 考古学会のことども」と人類学教室・人類学会をめぐる時代背景

ここでは「人類学教室 考古学会のことども」に記載されている人物やエピソードに関連する人類学教室や人類学会についての略史を述べておきたい（関連年表参照）。

日本の人類学の父とも呼ばれる坪井正五郎が、人類学会の前身となる「じんるいがくのとも」を結成したのは、彼がまだ東京大学理学部動物学科の学生であった明治一七（一八八四）年である。それは、日本の近代考古学の幕開けを告げた明治一〇（一八七七）年のエドワード・S・モースによる大森貝塚の調査の七年後のことであり、坪井は「じんるいがくのとも」結成以前の明治一四（一八八一）年に福家梅太郎とともに目黒で石器時代の遺跡調査を実施している。

関連年表

和暦	西暦	人類学会	集古会	考古学会	柴田常恵 〔雑録〕記述他	人類学教室関係者
明治二二	(二八八八)					
明治二〇	(二八八七)	八月の二卷一八号から『東京人類学会雑誌』と改題。				
明治一九	(二八八六)	六月の二卷五号から『東京人類学会報告』と改題。				七月 坪井正五郎、理学部動物学科を卒業。 九月 坪井正五郎、大学院入学。
明治二七	(二八八四)	二月「東京人類学会」と改称。機関誌第一号『人類学会報告』発行。				
明治二四	(二八八二)	一〇月坪井正五郎等「しんるいがくのとも」設立。 十一月「人類学研究会」と改称。 十二月「人類学会」と改称。				九月 坪井正五郎、理学部に入学。
明治一〇	(二八七七)				名古屋市の浄土真宗瑞忍寺で住職の三男として生まれる。	

関連年表（続き）

明治二八 (二八九五)	明治二六 (二八九三)	明治二五 (二八九二)	明治二四 (二八九一)	明治二三 (二八八九)	和暦	西暦	人類学会	集古会	考古学会	柴田常恵 〔雑録〕記述他)	人類学教室関係者
											一月一六日 若林勝邦、人類学研究室に勤務。 五月 坪井正五郎、イギリス・フランスにこの年より三年間留学。これに伴い助手を解職。これに伴い六月 若林勝邦、助手に就任。 一〇月 八木契三郎、人類学室に奉職。
											一〇月 大野延太郎、人類学室用図画として嘱託。 一〇月 坪井正五郎、帰朝。理科大学教授就任。 鳥居龍蔵、人類学室での勉学を許される。
											九月 坪井正五郎、人類学講座を担当。 鳥居龍蔵、人類学教室に勤務。
											四月 大野延太郎、人類学教室に画工として勤務。 七月 若林勝邦、帝国博物館歴史部に勤務。
											「人類学教室へ趣味の人々絶えず出入せしより、(中略)明治廿八年頃に集古會の成立を見るに至りし」 「考古學會の設立に際し最初の打合せ會は人類学教室にて行はれし」

関連年表 (続き)

和暦	西暦	人類学会	集古会	考古学会	柴田常恵 (「雑録」記述他)	人類学教室関係者
明治三五	(一九〇二)				九月 東京帝国大学 理科大学雇となり、 人類学教室に勤務。	九月 八木契三郎、 台湾総督府学務課に 囑託。 一〇月 大野延太郎、 助手に就任し、人類 学教室に勤務。
明治三六	(一九〇三)		三月一三日 『集古 会記事』が『集古会 誌』に改題。近藤活 版所発行。			
明治三八	(一九〇五)		一月一三日 印刷所 が水交社に変更。			
明治三九	(一九〇六)				東京帝国大学理科大 学助手となり、人類 学教室に勤務。	
明治四〇	(一九〇七)		一〇月八日 印刷所 が横田活版所に変更。			
明治四一	(一九〇八)		三月一三日 印刷所 が公木社に変更。			
明治四三	(一九一〇)			九月 『考古学雑誌』 第一卷第一号刊行。 以後、継続して刊行。 聚精堂発行。		
大正一〇	(一九二二)		一二月 『集古会誌』 が『集古』と改題。			
昭和一一	(一九三六)			『考古学雑誌』の印 刷所を吉川弘文館に 変更。		
昭和一六	(一九四二)	「日本人類学会」と 改称。		一月 「日本考古学 会」と改称。		

※ 柴田常恵氏略歴 『人類学雑誌』第63巻第6号によると一八九七(明治三〇)年八月に真宗東京中学高等科を修了とあるが、『日本考古学選集12 柴田常恵集』略年表及び『日本考古学史辞典』等では一八九七年に上京し、真宗東京中学高等科に入学との記載。

坪井は明治一九（一八八六）年に東京帝国大学大学院に進学して人類学を専攻、明治二〇（一八八七）年には埼玉県にある吉見百穴の調査を実施した。この調査で坪井とともに中心的役割を果たしたのが若林勝邦である。明治二一（一八八八）年、坪井は理科大学助手に就任、人類学研究室（翌年、人類学室と名称変更（長谷部一九四二）も設けられた。坪井は翌明治二二（一八八九）年から三年間、人類学研究のためにヨーロッパに留学した。この時、雇員であった若林勝邦が助手となり、坪井の留守を預かることとなった。

明治二五（一八九二）年、坪井は帰国すると理科大学教授に就任し、翌年には人類学教室が開設された。この間、坪井の周囲には、大学の内外を問わず人類学や考古学に興味を持つ多くの人々が集った。八木契三郎や大野延太郎（雲外）、鳥居龍藏、和田千吉といった若者がその代表であり、八木や大野、鳥居は坪井の下で人類学教室の構成員となるのである。さらに、明治二九（一八九六）年には考古学会が発会式及び第一回学会を開催、人類学関連の趣味同人会である集古会も同年に結成されている。この集古会において、その後長く中心人物となるのが林若吉である。

柴田常恵が人類学教室を初めて訪問したのは、その二年後の明治三一（一八九八）年のことであり、彼は明治三五（一九〇二）年に人類学教室雇となっている。

二、「人類学教室 考古学会のことども」の構成と内容

「人類学教室 考古学会のことども」は、改行によって分けられた十五の部分から構成されている（翻刻では凡例にも記したように、それぞれ〈1〉から〈15〉の番号を付した）。これらは柴田自身の体験であるかどうかや、時系列によって〈1〉〈3〉と〈4〉〈15〉の二つに内容を分けることができる。〈1〉〈3〉は、明治三一（一八九八）

年に柴田常恵が初めて人類学教室を訪れて以降、当事者として直接体験したことについての回想であり、(4)～(15)は、柴田が人類学教室を訪れた明治三一(一八九八)年以前の出来事を中心に人類学教室や人類学会の関係者、関係団体について、彼が他の人物から聞いた内容がほとんどを占めている。以下ではそれらの概要を示す。

① 柴田常恵自身の体験の回想 (1)～(3)

まず、柴田自身が当事者として見聞きした内容が記載されている(1)～(3)について簡単にみていこう。(1)には柴田常恵が初めて人類学教室を訪れることになったきっかけと訪問時の様子が記されている。すでに述べたように柴田が初めて人類学教室を訪れたのは、明治三一(一八九八)年のことであるが、当時彼が在籍していた史学館で人類学の講義をしていた坪井正五郎に来室を誘われたのがきっかけだったという。このとき柴田とともに人類学教室を訪れた史学館の同級生森潤三郎は、のちに近世学芸史研究家となった人物である。彼は作家森鷗外の弟で、坪井の「日本石器時代人コロボックル説」に対し、「アイヌ説」を掲げて論争をおこなった小金井良精の妻、喜美子は彼の姉にあたる。柴田は人類学教室を訪れた月について、「此時に森氏と共に人類学会に入會すること、為りしかは、翌月の雑誌にて報告され居る筈なれば、初めて教室を訪ねし月は雑誌を検すれば明白に為り得るなり」と記載している。『東京人類学会雑誌』第一五四号(明治三二(一八九九)年一月二〇日刊行)の「雑報」には、坪井正五郎の紹介による人類学会の新入会員として柴田と森の住所と氏名が掲載されている(東京人類学会 一八九九)。このことから、彼らが人類学教室を訪ねたのは、明治三十一年一月であるかと推定できる。このほか(1)には、当時の人類学教室の建物の様子や部屋の配置などがきわめて詳細に記されており、建物の配置などは当時の地図とほぼ一致している(図)。初期の人類学教室の状況を知ることができる貴重な証言である。

図

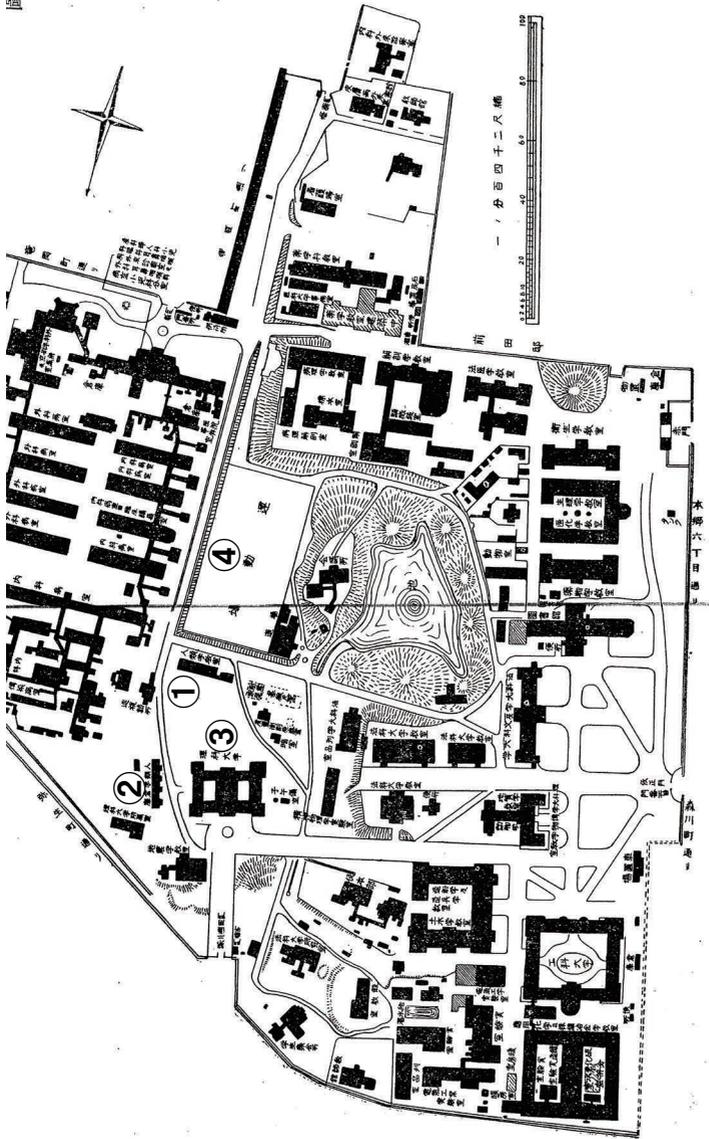


図 柴田常恵が初めて訪れた当時の東京帝国大学内の地図
 (①人類学教室、②人類学倉庫、③理科大学(本部)、④運動場)
 (東京帝国大学編 1932『東京帝国大学五十年史 下冊』所収「東京帝国大学平面図(明治四十年)」をもとに作成)

〈2〉には、坪井正五郎が主催して毎月開催されていた人類学会の例会の様子が生き生きと記されている。名前があげられている例会の出席者には、大学内外の多くの人々が含まれ、人類学に興味をもつ人々を分け隔てなく迎え入れた坪井の人情を偲ぶことができる。

〈3〉では、柴田が人類学教室で拓本に初めて接したときのことと述べている。柴田は、本學に所蔵される柴田常恵拓本資料（國學院大學研究開発推進機構学術資料館二〇一一）にみられるように、自ら拓本をとるだけでなく、各地の研究者を通して多くの拓本を収集するなど、生涯にわたって考古遺物の記録媒体として、拓本に重きを置いていた。〈3〉には、坪井と交友関係を持ち、人類学教室や人類学会に出入りしていた民俗学者山中共古（笑）が、拓本を製作する様子を、柴田が初めて見たときのこと、拓本の整理方法については、「弥生式土器」という名を初めて使用したことと知られる蒔田槍次郎がおこなっていた手法を彼が学んだことなどが記されている。このように〈3〉では、柴田と拓本の出会いが述べられていることももちろん興味深いが、当時の人類学教室では考古遺物の記録方法として実測図へと繋がる写生図が多用され、現在、遺物の図化の際に一般的に用いられている拓本があまり重視されていなかったという指摘は、考古学研究手法の歴史を考えるうえで注目される内容である。

② 人類学教室訪問後に得た人類学会・人類学教室に関連する人々や団体に関する内容〔4〕～〔15〕

〈4〉以降は、柴田常恵が東京帝国大学人類学教室への訪問以後に、人類学教室や人類学会の関係者、関係団体に ついて他人から聞いた内容がほとんどを占めている。〈4〉ではまず、柴田が「人類学教室 考古学会のことども」に人類学教室や人類学会のことを記述する意図、続いて最初期の人類学教室（人類学研究室・人類学室）の様子が述べられている。柴田は執筆の意図について、自身が人類学教室に在籍した前後の時期には、当然他の人物も教室に在籍

していたが、人類学教室の沿革に興味を持つ者が少なかった上に、関係者も続々と故人となるなかで、自らが当時の状況を証言する必要があると述べている。なかでも、古くから人類学教室に籍を置いていた八木契三郎について、「八木契三郎氏は教室との関係甚だ古きものあれど関係せる方面のみにして全躰に互る所なく、而かも往々自家の知見を本位とする傾向あり」と記す。八木契三郎は昭和一〇（一九三五）年、『ドルメン』第四卷第六号の「日本石器時代」と題された特集号に「明治考古学史」という文章を掲載している（八木 一九三五）。八木のこの文章は、自身の経験をもとに、明治の考古学界について回想した内容であるが、あとで詳述するように若林勝邦の来歴など、柴田の「人類学教室 考古学会のことども」に記されている内容と異なっている点が存在している。すでに述べたように「人類学教室 考古学会のことども」が執筆されたのは、八木の没後であり、「明治考古学史」は世に出ている。しかも、『ドルメン』の同号には柴田も「石器時代研究概観」という文章を寄せている（柴田 一九三五）。このような背景を考慮すれば、「人類学教室 考古学会のことども」にある「八木契三郎氏は教室との関係甚だ古きものあれど関係せる方面のみにして全躰に互る所なく、而かも往々自家の知見を本位とする傾向あり」の記述は、この八木の「明治考古学史」を意識しての言及である可能性が高い。

続く〈5〉（13）では草創期の人類学教室に関係した人物の来歴やエピソードなどが述べられ、〈14〉と〈15〉には人類学会との深い関わり合いの中から誕生した趣味同人団体である集古会の結成とその後の日本の考古学界を牽引することになった考古学会の設立について、それぞれ述べられている。各部分に記述されている主な内容は次の通りである。

〈5〉 若林勝邦の来歴

〈6〉 哲学館での若林による人類学講義の経緯

- 〈7〉坪井正五郎のヨーロッパ留学時の若林と人類学教室、大野延太郎の来歴、田中正太郎の来歴
- 〈8〉鳥居龍蔵の来歴、和田千吉の来歴
- 〈9〉初期の人類学会と学会誌刊行の様子
- 〈10〉福家梅太郎の来歴とエピソード
- 〈11〉若林勝邦が人類学教室を離れ、帝国博物館に移った経緯
- 〈12〉八木奘三郎の来歴、八木・大野・鳥居の人類学教室勤務最初期の様子
- 〈13〉林若吉の来歴とエピソード
- 〈14〉集古会結成の経緯、集古会メンバー清水晴風・奥村繁太郎の来歴
- 〈15〉考古学会設立の経緯と人類学教室

「人類学教室考古学会のことども」では、このように人類学教室の初期に関わった多くの人物や団体とそのエピソードが紹介されている。そのなかでもとくに記述の多い人物が〈5〉・〈6〉・〈7〉・〈11〉で言及されている若林勝邦であり、彼についての記述は考古学的意義も大きい。

若林勝邦は文久二（一八六二）年に生まれ、坪井正五郎よりも一歳年長である。明治二〇（一八八七）年の吉見百穴の発掘調査にも参加するなど、古くから坪井と関りをもち、人類学研究室開室後には同室の雇となった。いわば柴田の先輩である。明治二二（一八八九）年に坪井がヨーロッパに留学した際には、助手として坪井の留守を任されている。若林は、明治二八（一八九五）年の考古学会設立にも大きな役割を果たし、同年に人類学教室から帝国博物館に移っている。若林は、明治三七（一九〇四）年に四二歳の若さで没したこともあってか、近代の日本考古学史上最

初期の重要人物であるにも関わらず、これまで彼の事績については多くが語られることがなく、齋藤忠の言葉をかき取りれば「忘れられた考古学史上の人物」（齋藤一九九二）とされている。若林に関しては、齋藤忠（齋藤一九九二）や杉山博久（杉山二〇〇三・二〇〇四）による評伝があるが、これらでは、八木契三郎や鳥居龍蔵の回顧録（八木一九三五・鳥居一九五三）が大いに参考にされている。

「人類学教室 考古学会のことども」では若林勝邦について、これまで知られてこなかった記載や他の人物による若林に関する証言とは異なる記述がみられる。ここでは、「人類学教室 考古学会のことども」にある若林に関する記述の特徴を、若林の来歴（5）、彼が哲学館で人類学の講義を行うようになったきっかけ（6）、そして帝国博物館に移ることになった経緯（11）に着目し、これまでの若林に関する他の人物による証言やそれにもとづく研究と比較しながらみていく。

まず、彼の出生については、文久二（一八六二）年に江戸城馬場先で幕臣の子として生まれたとされている。これまでの一般的な理解である。これは八木の「明治考古学史」（八木一九三五）の記載によっている。この若林の出生をめぐって、杉山博久は八木自身が坪井正五郎の没後に『人類学雑誌』第二八巻第一号に掲載した「坪井博士の美点と欠点」（八木一九一四）のなかで、坪井が所持していた「生年録」ともいうべきもののなかに若林自身による記載として「何年何月江戸何藩邸に生る」とあったと述べていることに着目し、「確かに幕臣であったかどうか疑問が残る」としている（杉山二〇〇三・二〇〇四）。この若林の出生について「人類学教室 考古学会のことども」では、「若林勝邦氏は越後高田の榊原氏の家臣なり」と記載されており、これこそが坪井の所持していた「生年録」の若林の記載を反映した可能性が高い。

次に若林が坪井に代わって哲学館で人類学の講義を担当した事情についてである。若林は明治二一（一八八八）年

一月から四か月という短い期間ではあるが、哲学館で人類学の講義を担当している。これについて、鳥居龍藏は昭和二八（一九五三）年に刊行した自伝『ある老学徒の手記—考古学とともに六十年—』（鳥居一九五三）のなかで、当初、坪井が人類学の講義を担当したが、ヨーロッパ留学を命じられたため、急遽若林が受け持つことになったと述べている。この鳥居の記述について、杉山博久は坪井のヨーロッパ留学は翌明治二二（一八八九）年六月からであり、若林が講義を担当し始めた時期と不自然な時間差があると疑問を示し、八木奘三郎が「明治考古学史」に記すように哲学館の創始者井上円了が人類学の講義を坪井に依頼した際に、坪井が最初から若林を推薦したのだろうと考えている（杉山二〇〇三・二〇〇四）。一方、「人類学教室 考古学会のことども」では、若林が哲学館で人類学の講義を受け持つことになった事情について、〈6〉のなかで、井上による坪井への人類学講義依頼に対し、坪井が「未だ大学に行はざるに私立の学校にて講ずるは面白からず、去りとして學問の爲には結構なればとて」若林が講義をすることにしたこと、そのため、「我國の学校にて始めて人類学の講義を為せしは、哲学館にて若林氏なれど、事實は先生の代辯として為せしものなり」とそのときの事情が具体的に記されている。

そして、〈11〉には若林勝邦が明治二八年に人類学教室を離れ、帝国博物館に移った経緯が述べられている。若林が帝国博物館に移った理由については、杉山博久と齋藤忠はそれぞれ次のように記している。杉山は、「いま、若林勝邦が帝国博物館に移籍を希望した理由ははっきり伝わっていない」（杉山二〇〇三・二〇〇四）とし、齋藤は「くわしい事情は明らかではないが」としつつ、若林と帝国博物館の三宅米吉が人類学会の幹事として互いに交流し、考古学会設立の際にも助け合った関係もあり、三宅が引き抜いたのだろうと考えている（齋藤一九九二）。「人類学教室 考古学会のことども」では、この若林の帝国博物館への移籍について、牛込神楽坂での坑道発見を契機として起きた「遺跡」騒ぎを通して表面化した、帝国博物館の人材不足に対処するために三宅が坪井に依頼した上で若林が移

籍したことが詳細に記されている。

このように、〈4〉〈15〉には、若林勝邦に関する記述のように、人類学教室の関係者の来歴やそのエピソード、関連団体に関する詳細な内容が記されている。これらの情報を柴田は一体いかにして得たのであろうか。本文中には、この点について〈4〉の冒頭に「人類学教室の發達に就きては明治三十五年九月に教室に入りし後ち、折に触れて坪井先生より語られし所なり」とあるほかは、情報の出どころは記されていない。ただ、若林勝邦の来歴に関して坪井が所持していた「生年録」の記載と推定される内容がみられるように、坪井をはじめ、当事者本人、またはそれに近い人物から直接聞いた内容がほとんどであると推定される。

おわりに

ここまで「人類学教室 考古学会のことども」の内容について一部ではあるが、考古学的意義も視野に入れながらみてきた。「人類学教室 考古学会のことども」は、柴田自身の体験と彼が人類学教室や人類学会の関係者から得た情報をもとに執筆されている。それは日本における近代考古学の草創期に関する貴重な証言であり、考古学史研究に資するところは大きい。「人類学教室 考古学会のことども」を柴田が執筆した時期は、早くても昭和一〇年代後半である。このとき彼はすでに齢六十を過ぎていた。そこに記載されているのは、その半世紀ほど前の自身の体験であり、伝聞内容もまた、同じ頃に聞いたものが多いであろう。しかし、まるで昨日の出来事を記しているかのようなその詳細さには驚かざるをえない。大場磐雄は、柴田常恵を称して「博学多識」という語はまさに氏を指しているかと思う」（大場一九七一）と述べている。「人類学教室 考古学会のことども」には、まさに柴田のその特徴がよく表れている。

註

- (1) 柴田常恵資料に関して、これまでに刊行された目録、翻刻としては、
- ① 國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編二〇〇四『柴田常恵写真資料目録一』國學院大學日本文化研究所
- ② 加藤里美・田中秀典二〇〇五『柴田常恵「南洋行―解題と翻刻―』國學院大學日本文化研究所紀要』第九六輯
- ③ 國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編二〇〇六『柴田常恵写真資料目録二』國學院大學日本文化研究所
- ④ 國學院大學研究開発推進機構学術資料館編二〇一一『柴田常恵拓本資料目録』國學院大學研究開発推進機構学術資料館 がある。
- これらのほか、「國學院デジタルミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/top.do>)に、「柴田常恵写真資料」、「柴田常恵瓦拓本資料」、「柴田常恵野帳資料」が公開され、内容の検索が可能である。(平成二八年九月現在)
- (2) 八木装三郎の「坪井博士の美点と欠点」(八木一九一四)には次のように記載されている。「(坪井)氏に学生時代に生年録とも称す可きものを作り、夫に知己朋友の生年月及び誕生地を記入せしめて所蔵せり、此帖は井上四了、神保小虎、有坂鋁蔵、白井光太郎の諸博士を初め今日滔々たる学者名士の記述あり、(中略)而して若林勝邦君の記入には何年何月江戸何藩邸に生る年始て一歳とある為め飛だ御愛興となつて一坐を哄笑せしめたるに、勝邦君真面目にて皆々は漢文を知らぬから困るとの答弁あり」

引用・参考文献

- 大場磐雄 一九七一「学史上における柴田常恵の業績」『日本考古学選集 一二 柴田常恵集』築地書館
- 加藤里美・田中秀典 二〇〇五「柴田常恵『南洋行―解題と翻刻―』『國學院大學日本文化研究所紀要』第九六輯
- 國學院大學日本文化研究所
- 國學院大學研究開発推進機構学術資料館 二〇一一「柴田常恵拓本資料目録」國學院大學研究開発推進機構学術資料館
- 國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編 二〇〇四「柴田常恵写真資料目録 一」國學院大學日本文化研究所
- 國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編 二〇〇六「柴田常恵写真資料目録 二」國學院大學日本文化研究所
- 齊藤忠 一九八四『日本考古学史辞典』東京堂出版
- 齊藤忠 一九九二「若林勝邦の生涯とその業績―忘れられた考古学史上の人物―」大阪・郵政考古学会編『平井尚志先生古稀記念考古学論巧』第一集 大阪・郵政考古学会
- 齊藤忠 一九九三『日本考古学史年表』学生社
- 柴田常恵 一九三五「石器時代研究概観」『ドルメン』第六卷第四号 岡書院
- 集古会編 一九八〇『集古 復刻版』思文閣出版
- 杉山博久 二〇〇三・二〇〇四「探求に熱心なる人(一)〜(六)―若林勝邦小伝」『考古学雑誌』第八七卷第一号〜第八八卷第二号 日本考古学会

清野謙次 一九五四『日本考古学人類学史(上)』岩波書店

坪井正五郎 一八七六「本会略史」『人類学会報告』第一号 国光社

寺田和夫 一九七五『日本の人類学』思索社

東京人類学会 一八九九「雜報」『東京人類学会雜誌』第一五四号 東京人類学会

東京帝国大学編 一九三二『東京帝国大学五十年史 下冊』東京帝国大学

鳥居龍藏 一九五三『ある老学徒の手記——考古学とともに六十年——』朝日新聞社

日本人類学会 一九五五「柴田常恵氏略歴」『人類学雜誌』第六三卷第六号 日本人類学会

長谷部言人 一九四二「第十二章 人類学科」『東京帝国大学学術大觀 理学部・東京天文台・地震研究所』東京帝国

大学

八木装三郎 一九一四「坪井博士の美点と欠点」『人類学雜誌』第二八卷第一号 日本人類学会

八木静山(装三郎) 一九三五「明治考古学史」『ドルメン』第六卷第四号 岡書院

山口敏二 二〇〇五「日本の人類学」『日本の人類学文献選集』第一卷 クレス出版

付記

解題は、本文と図を石川、表の作成を杉山と大山が担当し、翻刻は杉山と大山が担当した。

〔書誌〕

【冊数】 一冊

【寸法】 縦二七・〇糎、横一九・三糎

【装丁】 線装本四ツ目綴

【外題】 なし

【内題】 なし

【丁数】 四八丁（扉含む）本文は三丁より一七丁まで

【本文文字】 漢字仮名混じり

【奥書】 なし

【その他】 扉裏に「雑録 人類学教室 考古学会のことども」と記載された付箋あり（本文と異筆、大場磐雄によるか）

〔凡例〕

- ・ 本稿は國學院大學所蔵の柴田常恵資料の一部を翻刻するものである。
- ・ 翻刻に当たっては、誤字、当て字、誤用等を含め、底本の表現を尊重したが、通説の便を考慮し、異体字等一部の文字は通用の字体に改め、句読点を適宜追加した。
- ・ 底本で改行されている部分で段落を分け、便宜上（ ）で番号を付した。
- ・ 翻刻者が補った文字は全て「」で示した。

〔資料翻刻〕

〔一〕

初めて帝大に人類學教室を訪ねしは明治三十一年のこと、覺ゆ。棚橋一郎先生の設立されし史學館に在りし時にして駒込なる中學郁文館に並置されしものなるが、二回の卒業生を出せしのみにて廃校に皈せり。最初の在學生は十名前後にて人類學は坪井先生の講ぜらるゝ所にして同學に森潤三郎氏あり。同氏は鷗外博士の舎弟、小金井教授の義弟とて、帝大の事情を知り居りしかは、坪井先生より教室の來觀を誘われしより勝手知りたる森氏と赴きしなり。教室は運動場の北側に道を隔て、東西に長く延びたる平屋建木造のペンキ塗にて灰色と記憶す。坪井先生在室されしが、標本室の案内は八木斐三郎氏にして此時始めて八木氏を知りしなり。教室は講義室、図書室、教授室、研究室の四室相列なり、講義、研究の両室は大にして、図書、教授の二室は小さく半ば程なり。更に研究室に接して一間の小使室ありしが、奥の方は物置に使用せらる。廊下は幅一間のもの北側に存し、東端を正面と為すも一般の出入は多く西方の入口を利用し居り。北側の中央にも扉の設けありしが、全く使用することなく鎖せし俣なり。南側は道路に沿ひて四目垣とし、其内側は裁込みと為り、西に接して埴輪を主とする古墳関係品を入れる、独立の小建物あり。勿論一室なり。二階建四戸前連続の倉庫は教室より離れ理科大学本館の東南にあり、石器時代の遺物を始めとし台湾南洋諸外国及びアイヌ土俗品陳列せられ、階下の第二第三室は石器時代の遺物が未整理の状態にて置かれ居たり。斯かる状態は後年子が人類學教室員として関係するに至りし後と雖も、大躰に於て變る所なかりしなり。此時に森氏と共に人類學會に入會すること、為りしかは、翌月の雜誌にて報告され居る筈なれば、初めて教室を訪ねし月は雜誌を検すれば明白に為り得るなり。

〈2〉

其後毎月の人類學會の例會には出席せしが、坪井先生は開會の始に報告を為され、終に種々批判や補足を与へらる、を常とし、此事は先生の最後まで変ることなく學會を常に指導するに力められ居りたり。例會後には研究室のストーブを繞りて心行くまで学事上の雑談が行はれ、必ず餅菓子が出づること、為り居り、各方面の人々として趣味の盡くることなく晩景に及ぶを常とせり。屢々出席する人には、大学関係には喜田貞吉、下村三四吉、中沢澄男、岡部精一、藤田明、堀田璋左右、原秀〔四〕郎、佐藤傳藏などの諸氏、民間よりは山中笑、奥村繁次郎、蒔田槍次郎、関保之助、野中完一、伊能嘉矩、村高幹博、林若吉の諸氏などあり。主として土俗遺物並に遺跡が話題と為り、遠足の計画などは雑談の間に起る傾向ありたり。例會後の場合を別にするも、教室へ来れば誰人か来り居りて種々の談話に甚た賑かなるものありしかば、関係者は本郷辺に來り或は大学に來れば一應立寄ること、為り、何時も來客絶へずして其間に種々の有益なる報告齎らされし所多く、知見を廣むること大なりしは敢て予のみにはあらざるべし。

〈3〉

野中完一氏が教室より福岡縣に赴き、石神山(イダ)より石盾(イシタ)を持來りて間もなき頃の事と覺ゆ。山中笑氏は古錢の研究家たりしより、拓本の作製を為すは今に始まらず金石文をも行ひ居りしかは、教室に來りて石盾の拓本を造り、之れに坪井先生に一策を請はる、俣狂鉢の和歌を書せられしを見たり。拓本の作製は始めて見しは此時なるが敢て予のみにあらざるもの、如く、遺物の拓本に作るに適するもの少からざれと、教室の諸君にて従來は殆んど試みるものなく、専ら大野延太郎氏の写生に待ち写真も使用されざる状態なりしに依りて知り得べし。従來一般に行はれしは釣鐘墨なれど鐘銘などを僅に為し得るに過ぎず、石土の間に行はる、乾拓は扁平なる碑面に適するも時間を要して簡単に為し得ず、古錢家の間に古く行はる、墨肉に依る濕拓の便なることを山中氏より聴くに至りしなり。八木契三郎氏が教室

より朝鮮へ赴くに當り拓本用の墨肉を調達せられしが、神田明神女阪下なる印判屋の墨肉が専ら古銭家の使用するものにて他の家のものは拓本適せず、とのこと、と特に其家の印肉を調達されし筈なり。此時八木氏に同伴されしは山中氏の令息なりしと記憶するが、朝鮮にて左程に多くの拓本を作られざりしのみならず、八木氏は終生拓本には餘りに興味を感せられしと見え、^(マ)此方面に就ては著しき事績を聞くに至らざりき。此頃教室へ屢々來らる、蒔田槍次郎氏は旗本の家にて、駒込傳中なる岩崎氏の六義園の向側に住せしが、拓本に興味を持ち和鏡古瓦などを拓本と爲し、之れを切抜き臺紙に帳付けて整理されしが、氏は写真絵画など技術に堪能なりし故出來栄へ甚だ宜しきを得たり。此事は子が教室へ入りし後なれど蒔田氏の整理法を見るに至り、之れに従ふこと、す。其時に至るも拓本を作ることには教室に於ても予以外には殆んど試みるものなく、稀に野中完一氏が研究の爲めと云ふより蒐集の便宜上より之れを行ふことある程度に過ぎざれば、墨肉を始めとして其材料を用意されず。文科大学には史料編纂掛と雖も之れを行ふものなく、拓本は取扱ふも之れを作ることなく、工科大学にては建築科にて関野貞氏の朝鮮古建築調査に拓本を作らるものあれど鈎鐘墨に依るを主とし、之れを一度火にして軟めたるを指頭を以て作る独自の工夫に依る一種の乾拓とも云ふべきものに属し、平滑なるもの廉大なるものに適するも然らざるには効なし。博物館の歴史課に森田正安氏ありて善く拓本を作りしが、碑石の類にして文字を主とせしより考古學には關係を有せざりき。

〈4〉

人類學教室の發達に就きては明治三十五年九月に教室に入りし後ち、折に觸れて坪井先生より語られし所なり。教室のことは何事も心得置き貫ひ度く躑て此事も歴史の一端なるべしとて語られしが、別に記録する程もなかりしかは心得置く程度に聞き流し置き。教室には大野、鳥居の両先輩ありしも事務に携はること少く、教室のことは主として先生の指揮を仰ぎて予の關係する所たりしより理學部の本部の接觸も繁く、殊に歴史關係のこととは大野、鳥居の

両先輩には歡心を惹かざりし故にや、殆んど語らるゝ所なかりし。先生逝き給ひては殆んど之れを知るものなく、八木契三郎氏は教室との關係甚だ古きものあれど關係せる方面のみにして全躰に互る所なく、而かも往々自家の知見を本位とする傾向あり、尚ほ教室を去りてより久しきを經るものあり。若林勝邦、佐藤傳藏、大野延太郎の諸先輩に次ぎ、八木氏また逝かれて殆んど往事を語るものなく、鳥居氏の後を受けて松村曠氏教室に主たりしも此等のことには全く無趣味にして念とする所なし。長谷部言人氏更に其後を受けしも、醫學部出身にて先生御他界後に教室に入らせらるゝ様に為り、其後新潟仙台に轉して松村氏の後を継がれしこと、て、往事を知れるものは大半逝きて残存するは乏しく、其間に接觸の機會も乏しきより、今にして筆録せざれば遂に知り能はざるものあるべし。東京人類學會の設立は先生等が尚ほ大學の學生たりし時代のこと属するが、教室の發達は先生が明治十九年七月理科大學動物学科を卒えて大学院に入り人類學を専攻さるゝに始まる。人類は動物に属すれど動物學は主として下等動物の研究に力むるも人類自身の研究も行はるべし、との立場より動物學より人類學を専攻さるゝに至りしものにて、其入學をも許可されし所以なり。當時の動物主任は箕作佳吉先生なりしなり。先生始め人類學會の關係者に依り土器石器類が蒐集せられ、先生が大学院を卒えて二十一年九月に理科大學助手を命ぜらるゝ、頃に至り、動物學教室より離れて一室を設けらるゝこと、為り、今は存せざれど麟祥院の裏手を突当り無縁坂に折るゝ、場處に大學病院の鉄門あり、後に赤門脇に移されて資料編纂掛と為りたる大時計の建物ありしが、其傍らなる旧來の建物の一室が人類學の爲に与へらるゝに至り、未だ教室と稱するを得ざれば假に人類學室と云ひ居り。門札にも斯く書されしもの倉庫内に残存せるを見しことあるが、印判にも人類學室の四字を刻するもの残存し居たり。此名称は別に定まれるものにあらず、便宜上より先生の案出に過ぎざれど一般に用ゐらるゝに至りしと云ふ。

〈5〉

若林勝邦氏は越後高田の榊原氏の家臣なり。其頃東京には小學校の設備貧弱にして寺小屋風のもの多く、裏長屋などを利用して経営する私學校を代用と為す状態にて、明治三十年に及び予の上京せし後に於ても然るもの尚ほ比々として存し、公立の小學校は一区内に二三に過ぎざりき。若林氏は此種の小學校の湯島辺に在るものに教員たりしが、坪井先生を訪ねて人類學に興味を有するに至り、遂に未だ英語を知らざりしより、先生は之れを教へしが、勉強には随分熱心なるものありしと云ふ。氏が榊原氏の藩邸は龍岡町に在りしこと、て小學校の餘暇大學に來りて教を受くる便宜がありし故もあるべし。

〈6〉

東洋大学の前身なる哲學館が井上円了氏に依つて設立せられ、未だ現在の小石川鷄声ヶ窪ならず駒込に在りし設立の當初に於て、人類學の講義を先生に依頼せしが、最新の學問とて井上氏の之れが講義を望まれしも理由あることなり。然れども坪井先生は未だ大學に行はざるに私立の學校にて講ずるは面白からず、去りとして學問の爲には結構なればとて先生に代りて若林氏が講義に出掛くること、爲り、タイラーの人類學を若林氏に教へて直に之れを哲學館に行きて講じたりき。故に我國の學校にて始めて人類學の講義を爲せしは、哲學館にて若林氏なれど、事實は先生の代辯として爲せしものなり。

〈7〉

明治二十二年六月人類學研究の爲め先生の海外留學のことあるに及び、若林氏は先生に代りて大學助手と爲り、不在中の人類學室に主と爲り、人類學會のことは三宅米吉氏代つて編輯に當らる、事と爲る。若林氏は先生の不在中に、全國の石鐮を調査して形式の分布を見るとて各地に旅行を試み、採集の石鐮を写生する爲め大野延太郎氏に託するに

至れり。三宅氏は金港堂にありて教科書の編纂に従事されしが、其画工として大野氏は勤務し居られしより、人類學雜誌の編輯に當り挿入の圖画を描くことなどより若林氏に接近の機會を生じ、時々人類学室に來りて石鎌を写生するに至りしなり。一枚幾何と云ふ定めにて成績に依りて画料を支拂はれ居りたり。大野氏は先生の海外より飯朝前より關係する所にして、石鎌や石斧の写生を為すに実物と比較とて若林氏が寸毫の相違なき様にと云はれ、大学の先生は變なことを為さしむるもの、と思ひなから為したりと云はる。大野氏は越前丸岡の有馬氏の家臣にして洋画を松岡寿に学び、飛騨高山の中學校に画学教師として赴きしが、辭して東京に販り金港堂に關係するに至りしなり。後年鳥居龍藏氏の生蕃調査に隨ひて臺灣に赴き、火傷の爲め死亡するに至りし田中正太郎は當時の生徒の一人にて、其頃にも石器を弄び居りしより教場にて叱りしことありしが、後に上京して計らすも人類学教室に出入すること、為りて相會せるなり。田中氏は教室員にあらざりしも、教室發行の石器時代遺蹟地名表の最初の編輯に當りしは、氏と林若吉氏との兩名なり。

（8）

鳥居龍藏氏は坪井先生が洋行前に徳島縣旅行されし時訪ね來りて先生を知るに至りしものにて、後には徳島人類學會を其地に起せしなり。同様に和田千吉氏は姫路に在りて、先生の其地に到りし際に知りて姫路人類學會を起せしなり。和田氏は酒井家の旧臣にて町奉行を務めし家柄と聞けるが、郵便局に勤務し居り、後に東京に出て、中央電話局に轉じ、更に帝室博物館に入るに至れり。鳥居氏は久しからずして上京せしが、郷里の關係にて小杉楡邨氏に接近せしも、人類学室へ出入せしが、先生洋行後は若林氏の好む所と為らず、遂に出入を禁せらるゝに至りしより、先生の歸朝までは其事なかりしが、歸朝さるゝに及び許されて出入するに至りし由先生より聞く所なり。

〈9〉

人類学会は坪井先生等が尚ほ大学の学生たりし頃、同好の白井光太郎、福家梅太郎等と謀りて設立されしものにて、神田孝平氏が根岸武香氏に宛てられし書面にも見ゆる如く、學校生徒等の設立するものを神田氏の援助に依り會長にも推されしなり。最初は炭酸紙一枚刷なりしを改めて活版と為せしものにて、雜誌の配達には郵便に託するもあるが、通学の往復に道寄りして郵便受箱に投入せし由は後年神保小虎氏より聞く所なり。印刷所は佐久間衡治氏が新に秀英舎を起すに當り、定期刊行物が愆しとのことにて佐久間氏自ら来りて請はれしより、秀英舎にて印刷せしむるに至れり。秀英舎は後年大に發展して東京に於て有数の印刷所と為るに及びしも、人類学雜誌は左程の發達を為すに至らず、部数は五百を出づること少く、而かも印刷費の支拂は發行所たる哲学書院より拂々しからず、秀英舎としては迷惑を感じしもの、如しと雖、創業以來の定期刊行物とて、佐久間氏歿後も引續いて為し居りたり。哲学書院は越後の高頭氏の始むる所にして井上田了氏の關係に依るものなるが、人類学雜誌の發行所と為りしも此關係に由来す。學會は最初は單に人類學會と稱せしも、將來各地に同様の會合の設立を考慮し東京の二字を冠せしものにて、北陸人類学会を始め姫路徳島にも兎に角に設立を見るに至りしなり。尚ほ雜誌に挿入の圖画は長原孝太郎氏の筆に為るものにて、同氏は岐阜縣人にして同縣人の關係にて神田氏に寄寓せし為めなるが、後に動物學教室に画工として在職せしことあれば、先生版朝後の掛圖用の絵画は氏の筆によるもの多く存し、大野延太郎氏の教室に入るに及び、長原氏は美術學校に轉せし為め關係薄らぐに至る。

〈10〉

福家梅太郎氏は香川縣人にして駒場の農科大学出身なり。人類学会創立前より先生と親交深く郷里の農學校長たりしも、上京の都度先生を訪ねらる。学生時代には相共に遺物の採集に出掛けられし由なるが、學校の關係にて渋谷方面

の遺跡を踏査さるゝに至りしが、モースの大森貝塚の調査に依り専ら貝塚が縄文土器を出たすことゝ為り居りしが、目黒の土器塚より大森貝塚と同様の土器を出だすに依り、貝塚以外に遺物包含地の存するを始めて知るに至りしなり。始め福家氏は此事を語らず秘密に附し置きしが、偶々同道にモースの講演を聴きし際、學問は公開して相共に研究すべき旨を述べしに感ずる所あり、其赧途泣いて土器塚の事を秘密せしを詫びて語られ、直に実査に赴きし程純真の人なりと先生より聞く所なり。

〈11〉

若林勝邦氏が帝室博物館技手に轉せしは、牛込神楽坂上に坑道現はれ盛んに新聞を賑はし來觀者群集せし時のことなり。先生も之れを見學に出掛けられしが、小杉榎邨氏の鑑定書なるものを入口に掲げ、衆人の注意をひかしむるものあり。専門家ならぬ小杉氏の書する所なるに、博物館の用紙に記せらる。此際、先生は本郷方面の麹屋に赴き、其製造場の内見を求めしが、地下に坑道を穿ち隣家のみならず道路を横切りて遠く掘鑿し居ることゝて、問題を生ずるを虞れて最初は之れを拒みしが、堅く口外せざる旨を約して漸く之れを見るを得たり。坑道は幾條も造られ居るが、極めて清潔なるものにて、使用久しきに及べば發酵面白からずとて、廃棄して新に営むものと云ふ。神楽坂上に存するもの、同様に麹室なること知られしより、不當なる鑑定を為せるのみならず、如何にも博物館として為せしかの如く其用紙を以てせるは館員たる小杉氏として不都合なりとて、其歴史課長たる三宅米吉氏を其居に訪ねて交渉せられしより、幾何もなく鑑定書は取除かれ世間の評判も消ゆるに至れり。此事ありてより、博物館に此方面の知識を有するものなく、英語を解するものなき有様とて失態を生ぜしことなれば、新知識を入れる、意味にて三宅氏より若林氏の貰ひ受けを先生に交渉を見るに至れり。既に若林氏との間には一應の承諾ありし模様とて、先生も承知されて遂に若林氏は博物館へ轉せらるゝに至りしなり。博物館としては初めて人類学の心得ありて英語を解する新人を得たるものにて、写真器を使用するもまた若林氏に始まると云はる。

〈12〉

八木樊三郎氏が教室に關係するに至りしは、若林氏と姻戚關係ありし故なり。教室は先生の外に助手たる若林氏のみなりしか人を雇ふ餘裕を有せざるより、室内の掃除などに若林氏は苦痛を感じしが、小使なれば使用しても宜しとのことあるに及び、若林氏の紹介に依り八木氏は教室に来れるなり。年少なれど勉学心篤き故、好んで大学來れるものとて、最初は羽織袴を着用して來れり。時には八木氏の掃除の成績宜しからざれば注意し呉れと自身の紹介せし所とて直接に云ひて可なるべきに、先生に之れを頼めることもありしと。大学にては小使なれば所定の半纏を着用せざるべからすとて、八木氏に着せしめしが、支給のものは大柄とて肩を為して着せしが、在室中のみにて往復は勿論然らざりしと。後に八木氏は雇員に轉ぜしが、大野延太郎氏は三宅氏に依り人類学雑誌の挿図描写のことより、若林氏の指揮に依り石鏃類の図写の爲め教室の事に関係するに至りしが、仕事に應じて謝礼を受くる程度なりし。後には雇員として採用せられ、人類学会よりは挿図の多寡に依らず月額の揮毫料を給せられ、大学よりの給料と併せて得ること、爲り、八木氏また大学の給料と雑誌編纂手當を月額に得ること、爲り、両氏共に殆んど同額を得る様に爲り、鳥居龍藏氏は最初は写字料として月々五円程を給せられしも、請求に應ずる支拂の形式なりしを、後に雇員と爲り助手に任せられしも、俸給に於ては殆んど同額の廿円なり。なほ、予が教室に入りたる明治三十五年に然りき。

〈13〉

林若吉氏は海軍の軍醫監たりし林紀を父とし、外務大臣たりし林薫、順天堂病院の佐藤進は共に父の兄弟なり。父は洋行中肺を病み遂に癒えずして逝きしより、若吉氏は一粒種の遺子なるが、性虚弱にて常に咽喉を痛めてハンケチを巻き居る始末とて、學事に専らなるに適せず。人類學は常に野外を跋涉して労役をこと、する傾向あればとて、教室へ出入すること、爲りたり。先生の父上、信良先生が蘭醫の關係にて林家との關係ありしより、此事あるに至りしも

のなり。林氏は單に教室に来るに止まりしが、同様の理由に依り、後に松村任三氏の一粒種の瞭氏は人類学教室に来ること、為り、撰科入学を為すに至れり。林氏は毎日教室に来る様に為りしかば、何等かの定まれる仕事あるを可とし、石器時代地名表の編纂が見らるゝに至りしなり。別に辞令を受け居るにあらざるより、集古会の方面に力を注ぎ、趣味の生活を主と為せしより、遂には教室に遠ざかるに至りしが、靖国神社裏手の屋敷地に住し、門構の様子、住宅の模様、すべて旧幕府時代を偲ぶに足るものあり。一二度訪ねしことありしが、後に三輪田女学校に敷地共に賣却し、牛込市ヶ谷に新居を卜するに至り愈々趣味的採集に力め、古書並に切支丹遺物などに顕著なる成績を挙げしも、基く所は人類学教室より發足せるなり。

〔14〕

集古會は明治三十五年十二月に長逝せる根岸武香翁を會長とせし所にて、其支持に待つもの多く、翁の歿後は事務所が其居の湯寫天神町なりしを移して、林若吉氏の居宅たる麴町四番町に轉せしめ、會務は専ら林氏の執る所と為りしが、會長は之れを領きたり。集古會の起るに至りしは、人類学教室へ趣味の人々絶えず出入せしより、其間に愛玩の器物を持ち寄りて會合を催し度き希望を懐くに至りて、明治廿八年頃に集古會の成立を見るに至りしなり。坪井先生も大に賛意を表せられしより、八木樊三郎、大野雲外の両氏は幹事の任に當りしのみならず、最初の参加者が教室關係者若くは其勧誘に基くもの多き所以なり。随つて會場は清水晴風氏の世話にて外神田仲町なる大時計前なる青柳にて催すこと、為りても、色々の相談は教室に於て行はれ、開會の度毎に林若吉は教室に來り、課題に關係する器物を倉庫より借出して陳列するを例とせられ、會誌の発行にも最初は大野雲外氏の筆に成る表紙画を以てする状態なりしなり。根岸翁逝きし後も同様の状態にありしも、八木氏教室を去り、坪井先生他界せられ、其間に教室との間に關係深かりし山中笑氏等相次きて簣を易ゆるに及び、大野雲外氏のみ独り存するに過ぎず、しかもまた林氏と前後して世

を終るに至りしより、旧來の會員にして尚ほ遺存するものなきにあらすと雖、當初の事情に就ては多く知る所なく、知るも趣味の傾向を異にするより殆んど忘れられ、全く無関係の状態と為れるなり。清水晴風氏は神田旅籠町に住める車屋にて、今日此頃ならば荷物自動車業とも云ふべきものなるが、諸国の玩具を集めて繪画を善くせしが家業を廢しては特色なしと自らも云ひ、大野氏等も之れを推賞せしが、遂には口髭を蓄へ、車屋を廢し繪ビラなどを描くに至りしと雖、集古會に依りて人に知らるゝに至りしなり。湯島天神町なる切通しに居りし奥村繁次郎氏は焼芋屋で芋繁と呼ばれ、種々の古書を探索して上野の図書館に入りて勉強も爲し、また珍しき書籍を求めて図書館へ世話をも爲し、英書を読む力を有せる人なりしが、何時しか焼芋を廢するに至りしは惜まるゝ所たり。此等の集古會に依つて知らるゝに至りし人尠からず。根岸翁は湯島に居りし関係より、廿五日に天神講と稱して同好者を自宅に集めて會合を催すこともあり、或は料理研究者石井泰次郎氏をして上野の鴛亭にて時代料理の會合を爲すなど、集古會より派生する種々の事項は幾多の推移を経て後年に影響するもの多きを覺ゆ。

〈15〉

考古學會の設立に際し、最初の打合せ會は人類學教室にて行はれし由を坪井先生より聴く所なり。集古會は趣味本位なれど考古學會は研究を本位と爲すを以て、毎月の例會にも教室を提供する筈に爲り居りしが、愈々會合を催すに至り、上野の美術学校にて開くに至りしが、福地復一氏が美術学校に在職せし故なりと。最初の考古學會雜誌より考古と題する頃は、後に神田の鎌倉河岸に移りし石川正作氏の東洋社にて發行されしも廢刊と爲りしを、三宅米吉先生の斡旋にて考古界と改題して金港堂より出版を見るに至り、更に柳田國男氏の世話にて本郷の聚精堂より出版さるゝこと、爲りて考古學會雜誌と稱するに至れり。其間に於て三宅先生は學會の會長に推され、博物館を中心とする形態を整ふるに至りしが、帝大に接近する傾向動きて毎月の例會を帝大の山上會議所にて開くこと、爲りしが、関係者の都合などより見合されて、今は博物館に於て行はるゝに至りしは、一學會の推移にも奇しき因縁の程を察知するに足るものあり。